

小林秀雄：演奏会用アリア「すてきな春に」

東京出身の作曲家・小林秀雄の爽やかなリリズムが香る本曲は、まさに春にふさわしい歌。心に仕舞いきれない思いがあふれ出すようなレチタティーヴォに始まり、恋のときめきと喜びが、優雅な3拍子にのせて歌われる。作詞は峯陽（みね よう）。

中田喜直：はなやぐ朝（組曲《魚とオレンジ》より）

20 世紀日本の童謡・歌曲を代表する作曲家・中田喜直によって書かれた女声のための組曲《魚とオレンジ》（全8曲）は、ごく普通の会社勤めの女性を主人公としている。「はなやぐ朝」はその冒頭を飾る曲で、コロラトゥーラの技巧も盛り込まれた華やかな朝の歌である。作詞は阪田寛夫。

山田耕柞の歌曲

ベルリンに留学した山田耕柞は、三木露風の詩集を携えていた。その後、折に触れて露風の詩に付曲し、全4曲からなる連作歌曲集《風に寄せてうたへる春のうた》でも露風の詩を用いている。「君がため織る綾錦」は、流麗な旋律が印象的な曲で、異国的な金銀細工ではなく、「さびた綾錦の匂い」を目指したという。「からたちの花」は、苦学した耕柞の思い出を、詩人・北原白秋が詞にしたもの。文部省唱歌にも選ばれた有名曲である。

ドビュッシー：《4つの青春の歌》

《4つの青春の歌》は、まだ20歳前後だったドビュッシーの若書きの作品をまとめたもので、ドビュッシーの歌曲創作の最初期を知るうえで興味深い。

「ピエロ」は、フランス高踏派の詩人テオドル・ド・バンヴィルの詩をもとに1881年頃、書かれた。日本でも馴染みのメロディで、ピエロも登場するフランス民謡「月の光に」が所々に引用されている。「月の光」の詩は、フォーレも付曲したことで知られるが、ドビュッシーの旋律は幻想的な美しさを誇る。第1稿は1882年頃に書かれた。「パントマイム」は、コメディ・デラルテのキャラクターたちが次々に登場する1882年の作品。「出現」は、「まぼろし」という邦題でも知られており、その難解さで有名なフランス象徴派の詩人ステファヌ・マラルメの詩を用いた1884年の作品。

プフィッツナー：《古い歌》

ハンス・プフィッツナーはロシアに生まれたが、20世紀初頭の新しい芸術の波に抗い、政治的にも保守主義を貫いたドイツの作曲家。声とピアノのための《古い歌》の原詩は、スイスの作家ゴットフリート・ケラーによるもので、1923

年に作曲され、同年にミュンヘンで初演された。娘が兵隊さんに呼びかける第1曲「私の輝く瞳」、夜の女に対して娘らしい自負を見せる第2曲「私は幽霊を恐れない」、男を手玉に取るような第3曲「乳飲み子よ」、恋を渴望する第4曲「私は朝露のなかを歩いて」、恋人への惚気を歌う第5曲「私の恋人はフィンチ（鶯）のように歌う」、意味深な第6曲「ローザよ、リンゴをかんでごらん」、いよいよ彼を家族に引き合わせる第7曲「お入りなさい、気高い戦士よ」、そして愛の有頂天を歌う第8曲「明るい月が輝くように」の全8曲からなる。

ドニゼッティ：あの方の優しい声が～香炉はくゆり～苦い涙を流せ（歌劇《ランメルモールのルチア》より）

スコットランドの作家ウォルター・スコットの小説を原作とする歌劇《ランメルモールのルチア》は、1835年にナポリで初演されて以来、不朽の人気を誇るドニゼッティの代表作。「あの方の優しい声が～香炉はくゆり～苦い涙を流せ」は、その終幕（いわゆる「狂乱の場」）で、正気を失った悲劇のヒロイン・ルチアによって歌われる。ここはベルカントのテクニックの大きな見せ場でもあり、多くのソプラノ歌手が輝かしい歴史を築いてきた。